［研究会 報告］

第 210 回　佐賀地域経済研究会

ベネッセアートサイト直島の活動の軌跡とその意義

佐賀地域経済研究会では、平成 29 年 5 月に佐賀大学において、「ベネッセアートサイト直島の活動の軌跡とその意義」と題した講演を開催した。

本講演では、ベネッセアートサイト直島で文化芸術活動を通した地域活性化に取り組まれている株式会社直島文化村・代表取締役社長の笠原良二氏を講師としてお迎えし、企業による文化活動の意義を端緒として、直島など瀬戸内海の島嶼部における官民連携による地域活性化の活動の軌跡について、お話しいただいた。

以下は、講演の概要をまとめたものである。なお、本文中にある「ベネッセハウス」と家プロジェクト「角屋」の写真は、ベネッセアートサイト直島から、ご提供いただいたものである。

【日時】平成 29 年 5 月 24 日（水）15:00～16:30
【会場】佐賀大学経済学部 4 号館 1 階　経済 4 番教室
【主催】佐賀地域経済研究会

（参加者：35 名）

■講演

◇ベネッセアートサイト直島の概要

まず笠原氏より、ベネッセアートサイト直島に関する概要説明がなされた。

ベネッセアートサイト直島は、備讃瀬戸の島々を舞台に、現代アート活動を通じて地域の再生を試みるものである。当初は香川県の直島から始まったが、現在は岡山県の犬島や香川県の豊島にまで活動の場が広がっている。

活動の中心に位置しているのは、これらの島々に創られた、現代アートを対象とする美術館である。中でも 2004 年に開館した直島の地中美術館には、国内外から多くの人々が訪れ、2015 年度の年間来館者数は 15 万人を超えた。また美術館だけではなく、後述する「家プロジェクト」のように、島内の生活空間を現代アートの舞台として活用する取り組みも大きな特色の 1 つである。

運営を担うのは、株式会社ベネッセホールディングスと公益財団法人福武財団である。進研ゼミなど教育分野で知られるベネッセホールディングスの企業理念は、人々の「Benesse（良く生きる）」を様々な形で支援することであり、同社の関連法人である福武財団の活動目的は、文化・芸術振興や循環型社会の実現を通して個性豊かな地域社会の発展に貢献することである。これらの理念に基づき、島々のコミュニティと島外からの来訪者をアートや建築を媒介として結びつけることが、ベネッセアートサイト直島の目標である。

続いて、プロジェクトの中心地である直島に関する紹介が行われた。直島は香川県高松市の北部に位置する面積 8 ㎢ほどの島である。島の北部は製錬所を中心とした工業地帯となっており、ベネッセアートサイト直島は南部一帯を所有して文化・芸術活動を展開している。

2000 年代の初頭まで、直島の観光入込数（観光施設への来館者の延べ人数）は年間 3 万人前後に過ぎなかった。しかし、地中美術館が開館した 2004 年を契機として入込数が急増し、現在では年間 40 万人を突破している。特に瀬戸内国際芸術祭が開催された 2010 年と 2013 年の入込数は約 60 万人に達し、現代アートは直島の集客増に大きく貢献している。

観光客の属性を見ると、首都圏に在住の若い女性が大きな割合を占めており、アートを軸とした地域活性化プロジェクトの特性が良く表れている。

美術館とホテルが一体となった施設「ベネッセハウス」

写真　山本糾

また、海外からの観光客も増えており、後述するベネッセハウスの 2015 年度の宿泊ゲストの半数以上は外国人であった。この事実からも見て取れるように、直島の取り組みは国際的に注目を集めており、欧州の芸術誌である *artpress* などでも大きく取り上げられている。また、世界的に強い影響力を持つ *Lonely Planet* などの旅行ガイドにおいても、東京・京都・北海道などと並んで直島が日本の主要な観光地の 1 つとして挙げられており、同島の国際的な知名度は相当に高まっていると言える。

◇ベネッセアートサイト直島の展開

次に、ベネッセアートサイト直島が発足した経緯と活動の歩みが説明された。出発点となったのは、直島町の町長を 9 期 36 年にわたり務められた三宅親連氏が提唱した「まちづくり基本構想」である。

直島の北部は大正時代より製錬所を中心として発展していたが、一方で、南部の開発は遅れていた。三宅町長は直島南部を文化・リゾートエリアとして観光開発する構想を打ち出したが、当初はうまく進展しなかった。しかし 1985 年に、福武書店の創業社長である福武哲彦氏が三宅町長の理想に共鳴したことを契機とし、社長を引き継いだ福武總一郎氏により「直島文化村構想」という名称で新たに動き出す。この構想は、単なるリゾート開発ではなく、人と文化を育てる場を作ることを目標に掲げており、これが現在のベネッセアートサイト直島へとつながることとなった。

この文化村構想は、まず子どもたちに交流の場を与える直島国際キャンプ場の開設から始まった。1990 年代に入ると、ホテルと美術館が一体となったベネッセハウスがオープンし、「自然・建築・アートの共生」というコンセプトに基づいた文化リゾート作りが進められていく。

そしてこの構想は、リゾート地の整備にとどまらず、地域住民の居住地をも取り込む形で拡張されていく。自然とアートに加えて、町の人々の生活や歴史もまた Benesse＝よく生きるという理念を支える重要なコンテンツであるという思いから、「家プロジェクト」がスタートする。これは、直島の本村地区に残る古い民家を修復・保全・復元しながら、現代美術の空

間として再生を試みるものである。2001 年には島の北部エリアまで含め、直島内一帯で空き家や民家や寺、神社などを現代アート空間として公開する「スタンダード」展として結実するに至った。

家プロジェクト公開第一弾の「角屋」

写真　上野則宏

そして 2004 年には、直島におけるアートの核となるべき施設として、地中美術館が設立される。この美術館は、クロード・モネ氏にウォルター・デ・マリア氏とジェームズ・タレル氏を加え、さらに建築家・安藤忠雄氏も含めた、4 名の芸術家によって作り出されたものであり、海外から注目を浴びる存在となった。前述したように、この美術館のオープンを契機として、直島を訪れる観光客は飛躍的に増加しており、ベネッセアートサイト直島が志向する芸術による地域再生活動の中核を担っている。

地中美術館の名称決定に際しては、多くの時間が費やされた。所在地である直島の名を付ける案や、運営主体である福武財団の名称を冠する案も検討されたが、最終的には建物の主要部分が地中に存在するという外観的、客観的特徴を表わす名称に決めた。これは、この美術館を数十年という短期的な視座でなくし、数百年という時間軸で将来にわたってこの地域の文化に貢献する場にしたかったからである。将来、地名や運営母体が変わっても、地中美術館という名称は変わることなく続いていくだろう。こうした長期的ヴィジョンが貫徹していることが、ベネッセアートサイト直島の大きな特徴である。

そしてこの活動は、直島の住民の積極的な協力によって支えられている。地元民による観光案内や、観光客への自宅のトイレの貸出など、様々なボランティア活動が展開されている。観光客の増加に伴い、地域住民による飲食店や民宿の新規開業も積極的に行われるようになった。これらの施設は地中美術館がオープンした 2004 年以降、着実に増加し続けている。

◇瀬戸内海、そして世界への展開

続いて、ベネッセアートサイト直島の近年の動向が報告された。活動は直島を越えて、瀬戸内海の島々に広がりを見せた。

岡山県の犬島は 2011 年時点で人口わずか 48 名、高齢化率 88％という地であるが、この島においても 100 年近く前から廃墟となっていた精錬所跡を活用した美術館が 2008 年にオープンし、直島と同様の「家プロジェクト」も実施されている。

香川県の豊島はかつて大量の産業廃棄物が不法投機され、その後長きにわたってネガティヴなイメージが付きまとっていた。こうした印象を払拭して地域の魅力を向上させ、島民の新たな誇りとすべく、2010 年に豊島美術館が設立された。

2010 年に初めて開催された瀬戸内国際芸術祭は、これらの島々におけるベネッセアートサイト直島の活動と連携させて、瀬戸内海全域を舞台とする現代アートを世界に向けて発信するという野心的な試みであった。このイベントは「アートと海を巡る百日間の冒険」と題し、瀬戸内海の各島々を廻って多数の現代アートを鑑賞・体感してもらうものである。この芸術祭は大きな話題を呼び、期間内に約 94 万人の

来場者を集めることに成功する。

2013 年には第 2 回目が開催され、来場者はさらに増加して 107 万人に達した。これを契機として、芸術祭の会場の 1 つであった男木島に子育て世帯が回帰し、1 度は子どもの減少によって廃校となった小学校が再開校されるという、地域振興面での大きな成果も得られた。

2016 年の第 3 回では、国際化の推進を新たなテーマとして掲げ、アジアの 13 の国と地域からアーティストを招き、「アジアパフォーミングアートマーケット」と題した企画が展開された。期間内の来場者数は約 104 万人で、前回と比べ微減したものの、うち 1 割を海外からの観光客が占めたため、1 人当たりの滞在日数や訪問会場数は増加した。その結果、経済効果は前回を上回る約 39 億円にのぼった。

◇講演のまとめ

最後に講演のまとめとして、笠原氏はベネッセアートサイト直島が目指してきた理想について、改めて述べられた。一連のプロジェクトの目標は一貫して、「Benesse（良く生きる）の実現」であり、地域の高齢者が笑って暮らせるコミュニティを芸術の力によって実現することを目指して、現在も継続的に種々の活動が行われている。福武總一郎ベネッセアートサイト直島代表の 3 つの言葉が紹介された。「自然こそが人間にとって最高の教師」、「在るものを活かし無いものを創る」、「経済は文化の僕」である。これらがベネッセアートサイト直島の活動を支える理念となっている。

◇質疑応答

講演終了後には、フロアからの質問受付の時間が設けられた。

講演会の参加者からは、「アートを利用した地域振興は多くの地方自治体において試みられているが、期待通りの成果を挙げられない事例も少なくない。ベネッセアートサイト直島が成功した要因は何であるか」という質問がなされた。

この質問に対して笠原氏は、「確固たるコンセプトを持たずに、集客だけを目標に美術館などを建設しても、それだけでは一過性のものに終わってしまう。ベネッセアートサイト直島は後世まで残る芸術の創造を目指し、長きにわたって地域に根づくアートを展開してきた。そして結果として様々な効果が生まれてきた。こうした長期的なヴィジョンが重要ではないか」と回答した。

（薗田 竜之介）